

ずいそう

インドネシア駐在の思い出

坂井 睦 哉



2016年1月に、約18年間のインドネシア駐在を終えて帰国しました。コマツに入社して約28年ですので、会社生活の半分以上がインドネシアでの仕事ということになります。インドネシアではいろいろな業務に関わったこともあり、振り返るとあっという間であったというのが正直な感想です。インドネシア駐在の思い出を書けば本一冊分くらいにはなると思いますが、誌面の関係もありますので印象に残った3つのピックを書きます。

1. 植林プロジェクト

1997年の4月に、インドネシア共和国林業省と弊社の植林プロジェクトのリーダーとして、赴任しました。当時、インドネシアの林業は、天然林施業から人工林施業へと大きく舵を切り始めていました。背景には、天然林施業の主要樹種であったフタバガキ科樹種の資源減少がありました。フタバガキ科樹種は、フィリピンではラワン、マレーシア・インドネシアではメランティと呼ばれ、戦後日本に輸入された南洋材の主力樹種です。しかし、結実が不定期なため苗生産が難しく、伐採の一方でほとんど植林されていないのが実態でした。伐採したフタバガキ科樹木の搬出のためのブルドーザを販売してきた弊社は、フタバガキ科樹種の再生植林に技術的に協力できればとの趣旨でプロジェクトに参画しました。プロジェクトでは、フタバ



ガキ科数樹種の苗生産技術を確立し、約20万本の植林を実施しました。もっとも古い植林地は約20年生となり、林業省の貴重な試験林となって、現在も研究・教育に有効活用されています。

2. アジア通貨危機のころ

赴任当時は、約30年続いたスハルト政権の末期でした。そのころ、それほど政治経済に関心を持っておりませんでした。1997年の8月頃に、それまで比較的安定していた交換レート1ドル=約2000ルピアが1ドル3000ルピアを超え、ドル預金引き出しの人々で銀行が混雑し始め、混乱の予兆を感じたのを記憶しています。その後、ルピアは急激に下落し、最終的には対ドルでその価値は20%以下になります。貨幣の意味を考えさせられた出来事でした。1998年5月に暴動が勃発し、それを引き金にスハルト政権が倒れます。その後、いろいろなものを読みますと、いろいろな思惑が絡んだ動きであったようですが。

当時、植林プロジェクトの面倒をみていた自分は、ジャカルタから南へ約60kmほど下ったボゴール市の、林業省の研究所に勤務しておりました。仕事仲間はインドネシア林業省の研究員で、日本人は一人でした。このころに最もインドネシア語を習得したと思います。

5月中旬だったと記憶している暴動の日は、研究所に出勤後しばらくすると、弊社現地法人の総務担当の日本人の方から電話があり、すぐに帰宅するようとのことでした。すでに、ボゴール市内でも道路封鎖が始まっており、林業省の職員の方にバイクで道順を偵察してもらった後、ジャカルタに戻る高速道路の入り口まで公用車で先導してもらいました。ジャカルタ市内への通行は警察によって規制されており、車がほとんど走っていない高速道路は緊張しました。

アジア通貨危機の後、インドネシアはしばらく迷走することになりますが、努力の甲斐もあって、2005年頃から資源高を背景に急成長を遂げることとなります。自分も、このころからジャカルタにあるコマツの現地法人に異動し、マーケティング関係の仕事をする

ことになりました。経済発展に伴い、ジャカルタではショッピングセンターが林立し、街中にはバイク、車があふれてきます。現在では、慢性的な交通渋滞で、一説には世界で最も渋滞の酷い都市と言われています。高速道路網、MRT、空港拡張、高速鉄道等のインフラ整備が急ピッチで進んでいます。一刻も早くインフラの脆弱さを克服し、さらなる発展を目指して欲しいです。

3. インドネシアのサッカー

さてここからは、思い出に残ったインドネシアのサッカーを紹介したいと思います。インドネシアはバドミントンが有名ですが、実は一番人気のあるスポーツはサッカーです。どんな地方に行っても、男の人は例外なしにサッカーの話が好きです。最も有名な日本人は、ナカタ。ホンダ、トヨタも有名ですが、人の名前とは認識していないかも知れません。会社にいた運転手さんの子供の名前はマリオ、往年のアルゼンチン代表のストライカーでインドネシアリーグでもプレーしたマリオ・ケンペスから取ったと言っていました。モスリムでマリオはありか、と思いましたが、それ以上は突っ込んでいません。

郊外に行くと、赤土むきだし、石ころだらけで、竹で作ったゴールのサッカーグラウンドがたくさんあります。プロリーグもあり、4年に一度の世界カップは全試合が民放で放映されます。もちろん、まだ出場したことはありませんが。

プロリーグのチームは各都市にあり、ライバル都市同士の対戦、例えばジャカルタ対スラバヤなどは、大

いに盛り上がり、サポーター同士のいざごごはしょっちゅう、警官が列を組んでピッチ内で警戒するほどです。ちなみにジャカルタのホームチームはプルシジャ、サポーターはジャックマニアと呼ばれ、ホームの試合になると何台ものバスを貸し切り、チームカラーのオレンジ色をまとってバスの上に乗って、大騒ぎでスタジアムに向かいます。現在は、日本人も何人かインドネシアリーグでプレーしているらしいです。また、各国の代表が争う東南アジア選手権は、お互い愛国心むき出しで、サッカーのレベルは別にして、大変白熱します。

自分の子供が通っていたサッカースクールのドイツ人サッカーコーチが（インドネシア協会に招聘されていたプロのコーチです）、ブラジルとインドネシアは、国土、人口、気候など似通っているにも関わらず、一方は世界チャンピオンで、一方はサッカー弱小国、理由はこう思うと持論を展開してくれました。ブラジルは、才能のある素材を認め、みんなが協力して育てて引っ張りあげるが、インドネシアにはまだそういうシステムがない。自分はまだブラジルには行ったことはありませんが、確かにインドネシアの少年サッカーは裾野が広く、10代前半くらいまでは高いレベルにあるような気がします。なぜ代表レベルの年齢になると急に失速するのでしょうか。

眠れる獅子のインドネシアサッカーが、ガルダを胸にワールドカップに出場するのを楽しみにしておきます。

——さかい ちかや コマツ 建機マーケティング本部

林業機械事業部——